# 白

芥川龍之介

# 一

ある春の午(ひる)過ぎです。白(しろ)と云う犬は土を嗅(か)ぎ嗅ぎ、静かな往来を歩いていました。狭い往来の両側にはずっと芽をふいた生垣(いけがき)が続き、そのまた生垣の間(あいだ)にはちらほら桜なども咲いています。白は生垣に沿いながら、ふとある横町(よこちょう)へ曲りました。が、そちらへ曲ったと思うと、さもびっくりしたように、突然立ち止ってしまいました。

それも無理はありません。その横町の七八間先には印半纏(しるしばんてん)を着た犬殺しが一人、罠(わな)を後(うしろ)に隠したまま、

一匹の黒犬を狙っているのです。しかも黒犬は何も知らずに、犬殺しの投げてくれたパンか何かを食べているのです。けれども白が驚いたのはそのせいばかりではありません。見知らぬ犬ならばともかくも、今犬殺しに狙われているのはお隣の飼犬の黒なのです。毎朝顔を合せる度にお互の鼻の匂を嗅ぎ合う、大の仲よしの黒なのです。

白は思わず大声に「黒君！　あぶない！」と叫ぼうとしました。が、その拍子に犬殺しはじろりと白へ目をやりました。「教えて見ろ！　貴様から先へ罠にかけるぞ。」――犬殺しの目にはありありとそう云う嚇

しが浮んでいます。白は余りの恐ろしさに、思わず吠(ほ)えるのを忘れました。いや、忘れたばかりではありません。一刻もじっとしてはいられぬほど、臆病風(おくびょうかぜ)が立ち出したのです。白は犬殺しに目を配(くば)りながら、じりじり後(あと)すざりを始めました。そうしてまた生垣(いけがき)の蔭に犬殺しの姿が隠れるが早いか、可哀(かわい)そうな黒を残したまま、一目散(いちもくさん)に逃げ出しました。

その途端(とたん)に罠が飛んだのでしょう。続けさまにけたたましい黒の鳴き声が聞えました。しかし白は引き返すどころか、足を止めるけしきもありません。ぬかるみを飛び越え、石ころを蹴散(けち)らし、往来どめの縄(なわ)を擦(す)

り抜け、五味（ごみ）ための箱を引っくり返し、振り向きもせずに逃げ続けました。御覧なさい。坂を駈（か）けおりるのを！　そら、自動車に轢（ひ）かれそうになりました！　白はもう命の助かりたさに夢中になっているのかも知れません。いや、白の耳の底にはいまだに黒の鳴き声が虻（あぶ）のように唸（うな）っているのです。

「きゃあん。きゃあん。助けてくれえ！　きゃあん。きゃあん。助けてくれえ！」

## 二

白はやっと喘ぎ喘ぎ、主人の家へ帰って来ました。黒塀の下の犬くぐりを抜け、物置小屋を廻りさえすれば、犬小屋のある裏庭です。白はほとんど風のように、裏庭の芝生へ駈けこみました。もうここまで逃げて来れば、罠にかかる心配はありません。おまけに青あおした芝生には、幸いお嬢さんや坊ちゃんもボオル投げをして遊んでいます。それを見た白の嬉しさは何と云えば好いのでしょう？　白は尻尾を振りながら、一足飛びにそこへ飛んで行きました。

「お嬢さん！　坊ちゃん！　今日は犬殺しに遇いましたよ。」

　白は二人を見上げると、息もつかずにこう云いました。（もっともお嬢さんや坊ちゃんには犬の言葉はわかりませんから、わんわんと聞えるだけなのです。）しかし今日はどうしたのか、お嬢さんも坊ちゃんもただ呆気にとられたように、頭さえ撫でてはくれません。白は不思議に思いながら、もう一度二人に話しかけました。

「お嬢さん！　あなたは犬殺しを御存じですか？　それは恐ろしいやつですよ。坊ちゃん！　わたしは助かりましたが、お隣の黒君は摑まりましたぜ。」

　それでもお嬢さんや坊ちゃんは顔を見合せているば

かりです。おまけに二人はしばらくすると、こんな妙なことさえ云い出すのです。

「どこの犬でしょう？　春夫（はるお）さん。」

「どこの犬だろう？　姉さん。」

どこの犬？　今度は白の方が呆気（あっけ）にとられました。

（白にはお嬢さんや坊ちゃんの言葉もちゃんと聞きわけることが出来るのです。我々は犬の言葉がわからないものですから、犬もやはり我々の言葉はわからないように考えていますが、実際はそうではありません。犬が芸を覚えるのは我々の言葉がわかるからです。しかし我々は犬の言葉を聞きわけることが出来ませんか

ら、闇の中を見通すことだの、かすかな匂を嗅ぎ当てることだの、犬の教えてくれる芸は一つも覚えることが出来ません。）

「どこの犬とはどうしたのです？　わたしですよ！　白ですよ！」

けれどもお嬢さんは不相変気味悪そうに白を眺めています。

「お隣の黒の兄弟かしら？」

「黒の兄弟かも知れないね。」坊ちゃんもバットをおもちゃにしながら、考え深そうに答えました。

「こいつも体中まっ黒だから。」

白は急に背中の毛が逆立つように感じました。まっ黒！　そんなはずはありません。白はまだ子犬の時から、牛乳のように白かったのですから。しかし今前足を見ると、いや、――前足ばかりではありません。胸も、腹も、後足も、すらりと上品に延びた尻尾も、みんな鍋底のようにまっ黒なのです。まっ黒！　まっ黒！　白は気でも違ったように、飛び上ったり、跳ね廻ったりしながら、一生懸命に吠え立てました。

「あら、どうしましょう？　春夫さん。この犬はきっと狂犬だわよ。」

お嬢さんはそこに立ちすくんだなり、今にも泣きそ

うな声を出しました。しかし坊ちゃんは勇敢（ゆうかん）です。白はたちまち左の肩をぽかりとバットに打たれました。
と思うと二度目のバットも頭の上へ飛んで来ます。白はその下をくぐるが早いか、元来（もとき）た方へ逃げ出しました。けれども今度はさっきのように、一町も二町も逃げ出しはしません。芝生（しばふ）のはずれには棕櫚（しゅろ）の木のかげに、クリイム色に塗（ぬ）った犬小屋があります。白は犬小屋の前へ来ると、小さい主人たちを振り返りました。
「お嬢さん！　坊ちゃん！　わたしはあの白なのですよ。いくらまっ黒になっていても、やっぱりあの白なのですよ。」

白の声は何とも云われぬ悲しさと怒りとに震（ふる）えていました。けれどもお嬢さんや坊ちゃんにはそう云う白の心もちも呑みこめるはずはありません。現にお嬢さんは憎（にく）らしそうに、

「まだあすこに吠（ほ）えているわ。ほんとうに図々（ずうずう）しい野良犬（のらいぬ）ね。」などと、地だんだを踏んでいるのです。坊ちゃんも、――坊ちゃんは小径（こみち）の砂利（じゃり）を拾うと、力一ぱい白へ投げつけました。

「畜生（ちくしょう）！　まだ愚図愚図（ぐずぐず）しているな。これでもか？　これでもか？」砂利は続けさまに飛んで来ました。中には白の耳のつけ根へ、血の滲（にじ）むくらい当ったのもあ

ります。白はとうとう尻尾（しっぽ）を巻き、黒塀の外へぬけ出しました。黒塀の外には春の日の光に銀の粉（こな）を浴びた紋白蝶（もんしろちょう）が一羽、気楽そうにひらひら飛んでいます。

「ああ、きょうから宿無し犬になるのか？」

白はため息を洩（も）らしたまま、しばらくはただ電柱の下にぼんやり空を眺めていました。

## 三

お嬢さんや坊ちゃんに逐（お）い出された白は東京中をうろうろ歩きました。しかしどこへどうしても、忘れる

ことの出来ないのはまっ黒になった姿のことです。白は客の顔を映（うつ）している理髪店（りはつてん）の鏡を恐れました。雨上（あまあが）りの空を映している往来（おうらい）の水たまりを恐れました。往来の若葉を映している飾窓（かざりまど）の硝子（ガラス）を恐れました。いや、カフェのテエブルに黒ビイルを湛（たた）えているコップさえ、――けれどもそれが何になりましょう？　あの自動車を御覧なさい。ええ、あの公園の外にとまった、大きい黒塗りの自動車です。漆（うるし）を光らせた自動車の車体は今こちらへ歩いて来る白の姿を映しました。――はっきりと、鏡のように。白の姿を映すものはあの客待の自動車のように、到るところにある訣（わけ）なのです。

もしあれを見たとすれば、どんなに白は恐れるでしょう。それ、白の顔を御覧なさい。白は苦しそうに唸(うな)ったと思うと、たちまち公園の中へ駈(か)けこみました。

公園の中には鈴懸(すずかけ)の若葉にかすかな風が渡っています。白は頭を垂(た)れたなり、木々の間を歩いて行きました。ここには幸い池のほかには、姿を映すものも見当りません。物音はただ白薔薇(しろばら)に群(むら)がる蜂(はち)の声が聞えるばかりです。白は平和な公園の空気に、しばらくは醜(みにく)い黒犬になった日ごろの悲しさも忘れていました。

しかしそう云う幸福さえ五分と続いたかどうかわかりません。白はただ夢のように、ベンチの並(なら)んでいる

路(みち)ばたへ出ました。するとその路の曲り角の向うにけたたましい犬の声が起ったのです。

「きゃん。きゃん。助けてくれえ！　きゃあん。きゃあん。助けてくれえ！」

白は思わず身震(みぶる)いをしました。この声は白の心の中へ、あの恐ろしい黒の最後をもう一度はっきり浮ばせたのです。白は目をつぶったまま、元来た方へ逃げ出そうとしました。けれどもそれは言葉通り、ほんの一瞬の間(あいだ)のことです。白は凄(すさま)じい唸(うな)り声を洩(も)らすと、きりりとまた振り返りました。

「きゃあん。きゃあん。助けてくれえ！　きゃあん。

きゃあん。助けてくれえ！」
この声はまた白の耳にはこう云う言葉にも聞えるのです。
「きゃあん。きゃあん。臆病（おくびょう）ものになるな！　きゃあん。臆病ものになるな！」
白は頭を低めるが早いか、声のする方へ駈（か）け出しました。
けれどもそこへ来て見ると、白の目の前へ現れたのは犬殺しなどではありません。ただ学校の帰りらしい、洋服を着た子供が二三人、頸（くび）のまわりへ縄（なわ）をつけた茶色の子犬を引きずりながら、何かわいわい騒（さわ）いでいる

のです。子犬は一生懸命に引きずられまいともがきもがき、「助けてくれえ。」と繰り返していました。しかし子供たちはそんな声に耳を借すけしきもありません。ただ笑ったり、怒鳴ったり、あるいはまた子犬の腹を靴で蹴ったりするばかりです。

　白は少しもためらわずに、子供たちを目がけて吠えかかりました。不意を打たれた子供たちは驚いたの驚かないのではありません。また実際白の容子は火のように燃えた眼の色と云い、刃物のようにむき出した牙の列と云い、今にも噛みつくかと思うくらい、恐ろしいけんまくを見せているのです。子供たちは四方へ逃

げ散りました。中には余り狼狽（ろうばい）したはずみに、路（みち）ばたの花壇へ飛びこんだのもあります。白は二三間追いかけた後（のち）、くるりと子犬を振り返ると、叱（しか）るようにこう声をかけました。

「さあ、おれと一しょに来い。お前の家（うち）まで送ってやるから。」

白は元来（もとき）た木々の間（あいだ）へ、まっしぐらにまた駈（か）けこみました。茶色の子犬も嬉しそうに、ベンチをくぐり、薔薇（ばら）を蹴散（けち）らし、白に負けまいと走って来ます。まだ頸にぶら下った、長い縄をひきずりながら。

二三時間たった後（のち）、白は貧しいカフェの前に茶色の子犬と佇（たたず）んでいました。昼も薄暗いカフェの中にはもう赤あかと電燈がともり、音のかすれた蓄音機（ちくおんき）は浪花節（なにわぶし）か何かやっているようです。子犬は得意（とくい）そうに尾を振りながら、こう白へ話しかけました。

「僕はここに住んでいるのです。この大正軒（たいしょうけん）と云うカフェの中に。――おじさんはどこに住んでいるのです？」

「おじさんかい？――おじさんはずっと遠い町にいる。」

白は寂しそうにため息をしました。

「じゃもうおじさんは家（うち）へ帰ろう。」

「まあお待ちなさい。おじさんの御主人はやかましいのですか？」

「御主人？　なぜまたそんなことを尋（たず）ねるのだい？」

「もし御主人がやかましくなければ、今夜はここに泊（とま）って行って下さい。それから僕のお母さんにも命拾いの御礼を云わせて下さい。僕の家には牛乳だの、カレエ・ライスだの、ビフテキだの、いろいろな御馳走（ごちそう）

があるのです。」

「ありがとう。ありがとう。だがおじさんは用があるから、御馳走になるのはこの次にしよう。――じゃお前のお母さんによろしく。」

白はちょいと空を見てから、静かに敷石の上を歩き出しました。空にはカフェの屋根のはずれに、三日月もそろそろ光り出しています。

「おじさん。おじさん。おじさんと云えば！」

子犬は悲しそうに鼻を鳴らしました。

「じゃ名前だけ聞かして下さい。僕の名前はナポレオンと云うのです。ナポちゃんだのナポ公だのとも云わ

れますけれども。——おじさんの名前は何と云うのです？」

「おじさんの名前は白と云うのだよ。」

「白——ですか？　白と云うのは不思議ですね。おじさんはどこも黒いじゃありませんか？」

白は胸が一ぱいになりました。

「それでも白と云うのだよ。」

「じゃ白のおじさんと云いましょう。白のおじさん。ぜひまた近い内に一度来て下さい。」

「じゃナポ公、さよなら！」

「御機嫌好う、白のおじさん！　さようなら、さよう

なら！」

## 四

その後の白はどうなったか？――それは一々話さずとも、いろいろの新聞に伝えられています。大かたどなたも御存じでしょう。度々危い人命を救った、勇ましい一匹の黒犬のあるのを。また一時『義犬』と云う活動写真の流行したことを。あの黒犬こそ白だったのです。しかしまだ不幸にも御存じのない方があれば、どうか下に引用した新聞の記事を読んで下さい。

東京日日新聞［＃「東京日日新聞」はゴシック体］。昨十八日（五月）午前八時四十分、奥羽線上り急行列車が田端駅附近の踏切を通過する際、踏切番人の過失に依り、田端一二三会社員柴山鉄太郎の長男実彦（四歳）が列車の通る線路内に立ち入り、危く轢死を遂げようとした。その時逞しい黒犬が一匹、稲妻のように踏切へ飛びこみ、目前に迫った列車の車輪から、見事に実彦を救い出した。この勇敢なる黒犬は人々の立騒いでいる間にどこかへ姿を隠したため、表彰したいにもすることが出来ず、当局は大いに困っている。

東京朝日新聞［＃「東京朝日新聞」はゴシック体］。

軽井沢《かるいざわ》に避暑中のアメリカ富豪エドワアド・バアクレエ氏の夫人はペルシア産の猫を寵愛《ちょうあい》している。すると最近同氏の別荘へ七尺余りの大蛇《だいじゃ》が現れ、ヴェランダにいる猫を呑もうとした。そこへ見慣《みな》れぬ黒犬が一匹、突然猫を救いに駈《か》けつけ、二十分に亘《わた》る奮闘の後《のち》、とうとうその大蛇を嚙《か》み殺した。しかしこのけなげな犬はどこかへ姿を隠したため、夫人は五千弗《ドル》の賞金を懸《か》け、犬の行方《ゆくえ》を求めている。

　国民新聞［＃「国民新聞」はゴシック体］。日本アルプス横断中、一時行方《ゆくえ》不明になった第一高等学校の生徒三名は七日《なのか》（八月）上高地《かみこうち》の温泉へ着した。一行は

穂高山《ほたかやま》と槍《やり》ヶ岳《たけ》との間《あいだ》に途《みち》を失い、かつ過日の暴風雨に天幕《テント》糧食等を奪われたため、ほとんど死を覚悟していた。然《しか》るにどこからか黒犬が一匹、一行のさまよっていた渓谷《けいこく》に現れ、あたかも案内をするように、先へ立って歩き出した。一行はこの犬の後《あと》に従い、一日余り歩いた後《のち》、やっと上高地へ着することが出来た。しかし犬は目の下に温泉宿の屋根が見えると、一声《ひとこえ》嬉しそうに吠《ほ》えたきり、もう一度もと来た熊笹《くまざさ》の中へ姿を隠してしまったと云う。一行は皆この犬が来たのは神明《しんめい》の加護だと信じている。

時事新報［＃「時事新報」はゴシック体］。十三日（九

月）名古屋市の大火は焼死者十余名に及んだが、横関(よこぜき)名古屋市長なども愛児を失おうとした一人である。令息武矩(たけのり)（三歳）はいかなる家族の手落からか、猛火の中の二階に残され、すでに灰燼(かいじん)となろうとしたところを、一匹の黒犬のために啣(くわ)え出された。市長は今後名古屋市に限り、野犬撲殺(ぼくさつ)を禁ずると云っている。

　読売新聞［#「読売新聞」はゴシック体］。小田原町(おだわらまち)城内公園に連日の人気を集めていた宮城(みやぎ)巡回動物園のシベリヤ産大狼(おおおおかみ)は二十五日（十月）午後二時ごろ、突然巌乗(がんじょう)な檻(おり)を破り、木戸番(きどばん)二名を負傷させた後(のち)、箱根(はこね)方面へ逸走(いっそう)した。小田原署はそのために非常動員を行

い、全町に亘る警戒線を布いた。すると午後四時半ごろ右の狼は十字町に現れ、一匹の黒犬と噛み合いを初めた。黒犬は悪戦頗る努め、ついに敵を噛み伏せるに至った。そこへ警戒中の巡査も駈けつけ、直ちに狼を銃殺した。この狼はルプス・ジガンティクスと称し、最も兇猛な種属であると云う。なお宮城動物園主は狼の銃殺を不当とし、小田原署長を相手どった告訴を起すといきまいている。等、等、等。

ある秋の真夜中です。体も心も疲れ切った白は主人の家へ帰って来ました。勿論（もちろん）お嬢さんや坊ちゃんはとうに床（とこ）へはいっています。いや、今は誰一人起きているものもありますまい。ひっそりした裏庭の芝生（しばふ）の上にも、ただ高い棕櫚（しゅろ）の木の梢（こずえ）に白い月が一輪浮んでいるだけです。白は昔の犬小屋の前に、露（つゆ）に濡（ぬ）れた体を休めました。それから寂しい月を相手に、こういう独語（ひとりごと）を始めました。

「お月様！　お月様！　わたしは黒君を見殺しにしました。わたしの体のまっ黒になったのも、大かたその

せいかと思っています。しかしわたしはお嬢さんや坊ちゃんにお別れ申してから、あらゆる危険と戦って来ました。それは一つには何かの拍子に煤よりも黒い体を見ると、臆病を恥じる気が起ったからです。けれどもしまいには黒いのがいやさに、――この黒いわたしを殺したさに、あるいは火の中へ飛びこんだり、あるいはまた狼と戦ったりしました。が、不思議にもわたしの命はどんな強敵にも奪われません。死もわたしの顔を見ると、どこかへ逃げ去ってしまうのです。わたしはとうとう苦しさの余り、自殺しようと決心しました。ただ自殺をするにつけても、ただ一目会いたいの

は可愛がって下すった御主人です。勿論お嬢さんや坊ちゃんはあしたにもわたしの姿を見ると、きっとまた野良犬（のらいぬ）と思うでしょう。ことによれば坊ちゃんのバットに打ち殺されてしまうかも知れません。しかしそれでも本望です。お月様！　お月様！　わたしは御主人の顔を見るほかに、何も願うことはありません。そのため今夜ははるばるともう一度ここへ帰って来ました。どうか夜の明け次第、お嬢さんや坊ちゃんに会わして下さい。」

白は独語（ひとりごと）を云い終ると、芝生（しばふ）に腭（あご）をさしのべたなり、いつかぐっすり寝入ってしまいました。

「驚いたわねえ、春夫さん。」

「どうしたんだろう？　姉さん。」

白は小さい主人の声に、はっきりと目を開きました。見ればお嬢さんや坊ちゃんは犬小屋の前に佇んだまま、不思議そうに顔を見合せています。白は一度挙げた目をまた芝生の上へ伏せてしまいました。お嬢さんや坊ちゃんは白がまっ黒に変った時にも、やはり今の

ように驚いたものです。あの時の悲しさを考えると、——白は今では帰って来たことを後悔する気さえ起りました。するとその途端です。坊ちゃんは突然飛び上ると、大声にこう叫びました。

「お父さん！　お母さん！　白がまた帰って来ましたよ！」

　白が！　白は思わず飛び起きました。すると逃げるとでも思ったのでしょう。お嬢さんは両手を延ばしながら、しっかり白の頸を押えました。同時に白はお嬢さんの目へ、じっと彼の目を移しました。お嬢さんの目には黒い瞳にありありと犬小屋が映っています。高

い棕櫚（しゅろ）の木のかげになったクリイム色の犬小屋が、――そんなことは当然に違いありません。しかしその犬小屋の前には米粒（こめつぶ）ほどの小ささに、白い犬が一匹坐っているのです。清らかに、ほっそりと。――白はただ恍惚（こうこつ）とこの犬の姿に見入りました。

「あら、白は泣いているわよ。」

お嬢さんは白を抱（だ）きしめたまま、坊ちゃんの顔を見上げました。坊ちゃんは――御覧なさい、坊ちゃんの威張（いば）っているのを！

「へっ、姉さんだって泣いている癖に！」

（大正十二年七月）

底本：「芥川龍之介全集５」ちくま文庫、筑摩書房
　　１９８７（昭和62）年２月24日第１刷発行
　　１９９５（平成７）年４月10日第６刷発行
底本の親本：「筑摩全集類聚版芥川龍之介全集」筑摩書房
　　１９７１（昭和46）年３月～１９７１（昭和46）年11月
※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ケ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。
入力：j.utiyama
校正：もりみつじゅんじ

１９９９年3月1日公開
２００４年3月9日修正
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。